岩園には二年居りましたが、二年目には、5学級増えたから、かなり北側の、教室としては不向きな所を教室にもらいましてね。芦中としても随分苦しいところでしたが、その辺から福田先生もご存知ですけれども……。2年になると理科教室も要りますし、岩園の方にも随分ご迷惑をかけたようです。

三年目に打出の校舎へ移転して、本当に学校らしくなったなあという感じでした。移転した当時、夏など浜まで裸で水泳に行ったりするという楽しい思い出も残っております。

あの当時のような先生と生徒とが一体になった気持ちがその後も続いていたら、本当にすばらしいんじゃないかな、と思います。近頃の学校というと、なにか寂しい気がしますけれども……。芦屋中学には、高校になってからも19年お世話になったんですが、非常に大きな変わり目というと、第8回生から、つまり新制中学を出てきた生徒になってから、なにか気風ががらっと変わったような気がします。7回生までは、忌憚の無いことを言えば、非常におもしろくやりましたわ。それ以後はどうも画一的になったような気がします。

現在の校地に移るまで

司会　福田先生は開校二年目の昭和16年にご着任なさっておられますが、岩園小学校から三年目には打出の仮校舎に移り、芦屋中学・芦屋高校は、校舎の問題では不遇だったように聞いているんですが、そのあたりを中心に当時のお話をお願いいたします。

福田　私は昭和16年9月5日に芦屋中学校に着任しました。精道村から芦屋市になって間もない頃でした。15年2月に文部省から芦中設置の認可が下りた時の予定地として、長谷川さんという方のお持ちの土地1万6千坪の中の1万坪を芦中の校地にすることが、精道村村会で決定されておりました。

この学校に赴任した時、山本校長からお聞きしたことは、校舎・校地は六甲中腹の芦屋天神の裏手を予定地とし、建物はこの設計図のようになります。誠に堂々たる新校舎建設の構想に心を砕いておられました。しかし時局はいよいよ緊迫し、切角の企画構想にも手のつけられる状況ではありませんでした。それかと言って、岩園小学校の校舎を一部借用しての仮校舎は、これ以上続けることは出来ません。市御当局で苦慮して立案された計画が、打出校舎の位置に、将来必要と考えられる第五国民学校の校舎を建て、これをしばらくの間、芦屋中学の仮校舎とすることでありました。

昭和17年、仮校舎に移りましたのが、3月12日、町の北の岩園から打出の浜近くまで、生徒総掛りで机や椅子を担いで第五国民学校へ引越しました。現在の精中のある場所ですが、この校舎を当分の間芦屋中学の専用校舎として使用することになりました。以来職員生徒共に落付いて学校での生活を送り得たと思いますが、大東亜戦争の最中です。陸士海兵飛行予科練へと進む生徒も出て来、昭和19年には3年以上の学年は担任教師と共に、学徒動員で軍需工場に出動しました。1・2年の一部は西宮の農家へ、残りは学校工場で勤労作業に従事した。この頃打出校舎の一部を川西航空に学校工場として提供し、1・2年の作業場としました。この打出校舎を学校工場に提供したことが、昭和20年6月5日の校舎全焼へつながったと思えます。

戦局急迫の中で ――打出仮校舎全焼――

金坂　ええ、20年の6月。それがあって間もなく、私は応召しているんです。だから、焼けた時にはこちらに居りました。

司会　その日はどんな具合でしょうか？

金坂　とにかく空襲で、どうも芦屋の方がやられていると言う。当時私は本山に住んでおりましたので、詳しい状況は分からないままに、電車は通っていないし、歩いて行ってみたら、校舎はすっかり焼けてしまって、僅かに机が出された程度で、今福田先生がおっしゃったように、備品などは失ってしまっているような状況でした。木造校舎に焼夷弾が落ちたものだから、どうにも手がつけられなかったというのが実状だった。

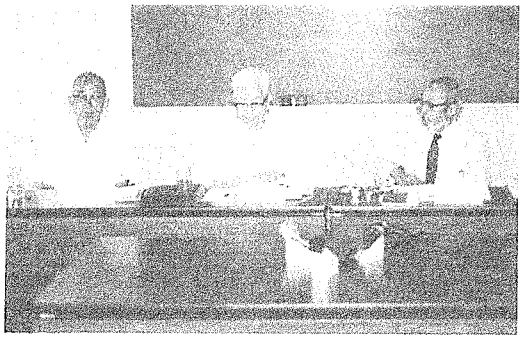
司会　それは夜中でしたか。

金坂　いえ、朝でしたね。

司会　全焼でしたか。

金坂　ええ全焼でした。

杢谷　全焼じゃなく、一番東側の端の方がちょっと残ったように思いますよ。残ったって使いものにならないでしょうが。



金坂先生　　福田先生　　杢谷先生

金坂　それから、少し補充致しますと、私が赴任してきた時には、三年後には芦屋天神さんの裏に立派な校舎ができると聞かされ、設計図も見せてもらいました。しかし実際次の年になるまでに一年経たないうちに、建築資材の関係からそろそろあやしくなっていました。だから、福田先生がいらした頃には、計画だけはあったけれども、ちょっともう目鼻がつかないような状態じゃなかったかと思うんです。しかし、第五小学校を建ててくれたのも、あの当時としては、かなり建築が制限されていましたが、芦屋市の大英断だったと思います。それがなかったなら、芦屋中学の存続はなかったと思う。

司会　空襲で全焼ということですから、あくる日からは、もう……

再建への苦難時代

金坂　その後は、惨憺たるものです。あちこちへ分散して流浪の民でした。

福田　20年３月15日―10月始め迄、軍の召集を受けていたので、その間のことは復員後、同僚誰先生より聞いたことであります。

20年６月５日	打出仮校舎全焼
〃　６月６日	１・２年宮川国民学校へ仮移転
〃　８月	阪神間空襲で、宮川国民学校一部焼失
〃　８月15日	終戦
〃　９月	海技訓練所の校舎を借用、１・２年収容。
〃　10月	本山第一・第二国民学校を仮校舎として借用。
21年３月	本山第一・第二国民学校を返還し、芦屋青年学校に移る。

同校はまことに老朽校舎で、部屋数は教室としては５室ほどしかなく、使えるものではなかったが、５教室を教室として使用しました。その使用法がどこでも見られぬ３部授業でありました。各学年は５組編成であり、月曜日午前中４時間を１年生、午後４時間を２年生、火曜日午前中を３年生、火曜日午後４時間を１年生とするような、不完全な授業の組み合せであった。

このような不完全な授業をつづけることは出来ません。市当局とも協議の上、宮川国民学校の校舎を芦中校舎とすることを市議会で決議され、色々と問題がありましたが、宮川国民学校が現在の芦高の校舎となりました。

司会　ええ、宮川小学校、今の芦屋高校、前の本館でしたね。

福田　そして、８月にその宮川小学校の一部が阪神間の空襲で焼けまして、僅かに本館の一階と東端を残すのみとなる。９月中は打出の海技専門学校の校舎を借りて授業をしました。

金坂　当時、海技訓練所とか言っておりましたね。それが９月からでした。それから10月に、本山第一・第二小学校を仮校舎として借りることができたのではないでしょうか。

杢谷　学校が全焼した当時は、学校の中にほとんど生徒がおりません。３年・４年は工場動員で、工場に勤務するのが授業ですから、残っているのは１年・２年でしょう。だから、１年・２年だけが、宮川小学校へ、後に海技専門学校へ、一時避難でね、なんとかなったわけです。

学徒動員

司会　昭和19年に、「３年生以上の生徒が学徒動員で出動した」という記録がございますが、その頃は、生徒や先生方はどんな様子でしたか。

福田　先生方も割り当てられて、直接工場の方へ通っていた。

金坂　1年・2年生は、その頃よく西宮の農家へ稲刈りや何かの作業に行きました。2・3回行ったように思います。

杢谷　残っておる1・2年も、「学校工場」と称して、勉強そっちのけで軽作業みたいなのをやってます。だから全焼しても、不安なことは不安なんだが、その点でさほど大きな支障は無かった。いわゆる、ちゃんとした校舎で、ちゃんとした勉強をした雰囲気と違いますからね。

私が着任したのが、19年4月でしたかね。着任して二月したら、サイパン陥落、戦局急迫でね、そして今お話した3年生以上は勤労動員ですわ。ちょうど私が着任した年が、旧制中学として、1年から5年まで揃ったんです。二か月、授業らしいものをしましたけど、二か月したら、私も小隊と称する一組（一組といっても、もとの組単位じゃなくて編成替えした）50人を連れて、久保田鉄工所武庫川工場に、6月から翌年の8月終戦まで一年と少しほとんど毎日通いました。

金坂　確か打出の校舎も川西航空の学校工場に指定されたことがあるんです。その時私は、3回生に転属になって日本パイプに行っておりましたから、その辺の詳しい事情は知りませんが、たまたま空襲のあった日は、まだ出勤前で、電車は停まっているというし、学校へ駆けつけてみたら……

司会　そうすると、全員学校に集まるのは、始業式と終業式ぐらいですか。

杢谷　一週間に一日だけ学校へ帰る日があるんですけどね、しかし、その一日どんなふうにして集合したのかな。敗戦間際の混乱期だから、それどころじゃないですわね。

福田　川西航空ね。校舎の150坪程で、芦中を工場に貸すという。

司会　工場とみなされたから空襲を受けたんでしょうかねえ？

杢谷　上空から見ますと、学校の南側に川崎重工の独身寮が、ずっと兵舎みたいにあったんですわ。（今では、建て替わっていますが、精中の南にやはり川崎の寮があります）空襲の一週間前に、たまたま、私、学校に居ったのですが、そしたら、上空をB29の偵察機がきちっと通ったんです。これは危いぞという予感があった。ああいう上空から見ると、それが兵舎の一角に見えたんでしょうなあ。だから、ぴしゃーと一撃で命中させて焼いてます。学校の北側に民家があったんですが、そこには全然被害が出てない。芦中と南側の川崎の独身寮にきれいに命中ですわ。一体として見られたんでしょうなあ。

新制高校発足当時

司会　昭和20年6月に空襲で焼け、その二か月後で終戦を迎えますが、生徒たちも工場から帰ってきて、急に民主教育に変わりますね。新制芦屋高校になるまでの学校の様子はどんな具合だったでしょうか。

杢谷　私は19年に芦屋中学校に着任して、それから37年まで18年間お世話になったんですが、その間に大きな敗戦、それから大きな変動があった。

一番、芦屋高校の学校造りに役立っているのは、たまたま、旧制中学の歴史が短かくて伝統的なものが無いままに新しい制度に移行したということで、それはある意味では強みであり、またある意味では一つの弱みでもあったと思っているんですがね。

それともう一つは、これは戦争でやむを得なかったせいなんだけれども、昭和19年・20年の入学試験のやり方です。これは、やむを得ざる学区制です。尼中、芦屋中学、それから、一中・二中・三中・四中・明石中学、そこまでが戦前の大阪湾ベルト地帯の総数に当たり、その志願者はそれぞれの中学を志願するのではなく、大きく「県立中学」を志願するという形を取ります。定員の合計総数で合格者を決めて、あとは地域毎に合格者を分けていくのです。（今で言う「総合選抜」にあたるものではないかと思います。）そこで、私が昭和20年に入学した生徒の担任になったんですが、聞く処に依ると、武庫川から西、住吉川から東の生徒が入っていますね。その頃は、宝塚にも西宮にも県立中学がありませんから、尼中、次が芦屋ですわ。19年の入学生と20年の入学生は、従来ある程度のレベルはあったろうが、一遍に芦屋中と一中へ入りたい者がたくさんおっただろうけど、一中へ入れない。だから、だいたいこ